# 茅野市総合教育会議　会議録

１．日　時　　令和５年２月７日（火）　　開　会　　午前　　９時 00 分
　　閉　会　　午前　　11 時 00 分

２．会　場　　市役所８階大ホール

３．出席者　　市長　　今井　敦　　教育長　　山田　利幸
　　職務代理者　　矢島　喜久雄　　教育委員　　勅使川原はすみ
　　教育委員　　若御子雅英　　教育委員　　竹村　節子
　　出席職員　こども部長　　五味留美子　　生涯学習部長　　北沢　政英
　　企画課長　　井出　弘　　こども課長　　阿部　香織
　　幼児教育課長　　柳澤　澄子　　学校教育課長　　五味　正
　　生涯学習課長　　竹内こずえ　　文化財課長　　五味　健志
　　スポーツ健康課長　伊藤　善彦　　教育総務係長　　春日　雅彦
　　教育総務係主事　　小池　智也

４．傍聴者　　１名

# 茅 野 市 総 合 教 育 会 議 次 第

令和５年２月７日（火）午前９時００分
市役所７階　７０３・７０４会議室

１　開　会

２　あいさつ

３　議　事

（１）茅野市の教育について

（２）その他

５　閉　会

○教育総務係長
　定刻になりましたので、茅野市総合教育会議を開催します。初めに、今井市長よりご挨拶をお願いします。

○市長
　大変お忙しい中、総合教育会議へご出席をいただきありがとうございます。コロナ禍も少しトンネルの出口が見え始め、少しずつ日常をとり戻しつつあります。昨日も市民号があり、横浜・鎌倉へ一緒に行ってきましたが、71人の方にご参加をいただき、非常に盛況でした。今年は何とか教育の現場も、日常を取り戻せればいいなと思っています。
　今日は、皆様方から、今、複雑多岐にわたり様々な視点がある教育について、できるだけわかりやすく、話し合えればいいなと思います。
　学校生活のこともあれば、部活をとおした問題、更に生涯学習関係では、今日の信濃毎日新聞にも載っていましたが、公民館活動をどう考えていくのかというようなことも、問題になってきている状況ですので、今日は皆様からざっくばらんにご意見いただき、その中で方向性を見出していかれればと思っていますので、よろしくお願いします。

○教育総務係長
　ありがとうございます。以降の議事進行については、今井市長に進めていただきたいと思います。

○市長
　早速、進行させていただきます。先ほど挨拶の中でも若干触れましたが、総合教育会議をとおして市長部局と教育委員会間の意思疎通をしっかりしていかなければ、教育行政はうまく進みませんので、そういった意思の疎通を図るという大きな目的になる会議です。
　先ほども申し上げましたが、茅野市の教育をシンプルに打ち出して、その軸を市民の皆さんに対してもわかりやすく提示できるように、それぞれの委員の皆様が思っていることを発言していただければと思います。
　本日この場で、何かを決定をしていくことではありませんので、ざっくばらんに発言していただければと思います。
　議事に進む前に、茅野市の教育大綱に現状の目標や方針等が記されていますので、その辺りをこども部長にご説明いただき、協議に入りたいと思いますのでよろしくお願いします。

○こども部長
　簡単ですがご説明します。
　はじめに、「教育大綱」をご説明させていただく前に、総合教育会議と教育大綱の関係についてご説明いたします。
　まず、総合教育会議は、改正地方教育行政法の施行により、平成２７年度からすべての自治体で首長が主宰し行うこととなり、首長と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、教育の課題や目指す姿等を共有、連携して効果的に教育施策を推進するための会議です。
　会議では、「教育行政の大綱の策定」、「教育の条件整備など重点的に講ずべき施策」、「児童・生徒等の生命・身体の保護等の緊急の場合に講ずべき措置」について協議・調整を行います。
　これまでの総合教育会議では、平成２７年７月、平成２８年２月に「茅野市教育大　綱の策定について」、平成３０年２月に「教育大綱について」、平成３０年８月、平成３１年２月に

は、「教育大綱の見直しについて」協議がされております。
　次に、「教育大綱」についてご説明いたします。お手元に「茅野市教育大綱」をご用意いたしましたので、ご覧ください。
　１ページをお願いいたします。「教育大綱」は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の３」に基づき、「総合教育会議」で協議し、地域の実情に応じた教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針などを定めたものです。
　「茅野市教育大綱」は、平成28(2016)年２月に策定し、令和元(2019)年３月に改訂されております。大綱の期間は、令和元(2019)年度から2027年度までの９か年となっておりますが、効果的な教育行政を推進するため、社会情勢を見極めながら、茅野市総合教育会議の中で協議・調整を行い、適宜、見直しを図るとしております。
　下段の体系図をご覧ください。この教育大綱は、子育て・教育・文化における基本計画の最上位に位置付けられております。
　２ページをお願いいたします。教育理念として「郷土を愛し、豊かな心を育み、人としての品格を養うことを教育の理念とし、「２１世紀を切り拓く心豊かでたくましく、やさしい、夢のあるひと育ちの茅野市教育」を進め、『生きる力』を育む」としております。
　３ページをお願いします。基本方針として、「市民一人ひとりが心身ともに健康で、人と人とのつながりのなかで、お互いの個性を認め合い、その人らしい生きがいや人生への夢を持ち、『生きる力』をともに育んでいく“ひとづくり”の教育を目指す。」としており、
　基本方針１　こども･家庭への支援･応援では、子どもが生まれる前から乳幼児期、学童期等それぞれの成長期において、「たくましく、やさしい、夢のある子ども」に育つことを願い、子どもと家庭を支援・応援する。
　また、幼児期は、子どもが生涯にわたる人格形成の基礎を培う大切な時期であるため身体的や知的な発達とともに、情緒的・社会的・道徳的な発達を育む教育を目指し、『生きる力』の基礎を培うとしており、家庭教育の充実、社会的援助を必要とするこども・家庭への支援、地域が支える子育て環境の充実、生きる力の基礎を培う、子どもたちの言葉と心を育む、健やかな健康を育む、育ちと学びをつなげ、を柱としています。
　基本方針２　次世代を担うひとづくりでは、学校教育は、幼児期からの連続した発達に配慮し、次世代を担う子どもたちの『生きる力』を育む教育の実現を目指し、「自ら考え、判断し、表現する力を身につけ、未来を拓く確かな学力（知）」「社会や時代がどのように変化しようとも、人としてまっすぐ生き、人を思いやれる豊かな心（徳）」「心と体の健康を鍛え、たくましく主体的に生きるための人生を支える健やかな体（体）」「健やかな心と体を育む食事（食）」の知・徳・体・食のバランスのとれた教育の実践に取り組むとしており、確かな学力を育む、子どもたちの豊かな心を育む、健やかな体を育む、安全・安心な教育環境の整備、を柱としています。
　基本方針３　学習機会の充実と場の提供では、生涯学習都市宣言の理念を踏まえ「生涯を通じて楽しく学び続ける、元気で心豊かな市民を育む」ことを目指し、子どもから大人まで市民一人ひとりが尊重され、生涯を通じて学び続けることができる学習機会の充実と場の提供を図る。
　「いつでも」「どこでも」「だれでも」学び続けられる環境を整え、自らの資質と能力を生かし、目標に向かって努力を重ねることで『生きる力』を育むとともに、未来を切り拓き、創造力あふれる人づくりを目指すとしており、「社会教育の推進」「スポーツを通じた健康づくり」「文化・芸術の振興と推進」「文化財の保護と活用」の４つを柱としています。
　簡単ですが説明は以上です。

○市長
　教育大綱についての説明がありましたが、教育長にこの教育大綱をベースに活動してきた茅野市の現状や、課題等をお話ししていただいてから、各委員にご意見をいただければと思います。

○教育長
　はじめに、私の立場になりますが、旧教育委員会制度では教育委員と行政の立場の２つを持っていました。そして、新教育委員会制度の中では教育委員の立場を持っていない行政の立場ということになります。従って、教育委員の皆様のご意見が今まで以上に重要になってきます。
　教育大綱の２ページをご覧ください。茅野市教育が目指す姿の課題については、全くこの通りで、生きる力を育むと言った時にその具体性が大切になります。そして、この生きる力というのは、前々回の学習指導要領で、国でも使い始めた言葉で、茅野市はそれを中心に据えましたが、生きる力の具体性が求められます。茅野市では、令和３年から、別紙グランドデザインの真ん中の柱にあるように「自分の人生、自分たちが生きていくまちの未来をえがく」ということを生きる力であると考えていますが、さらに浸透させていきます。
　４ページ目、こども・家庭への支援・応援に関わって、家庭教育の充実、或いは社会的援助を必要とする子ども・家庭への支援、地域が支える子育て環境の充実、これは全部１つになりますが、現在、子どもの貧困が問題となっています。そこで、市でも新たな計画を立て、子どもの貧困、経済的援助、精神的援助について、さらに考えていかなければならないと思っています。
こども家庭庁ができる中、国がどんな施策を打ち出すかも問題になってくるかと思います。
　６ページの、次世代を担う人づくりに関わって、確かな学力を育むという点は、基本的には変わりませんが、コロナの中で、「令和の学校教育」という方向性が文科省から出された点、次期学習指導要領の検討がすでに始まっている点、国の教育振興計画が、策定され始めている点を踏まえて、都度若干の軌道修正は出るかもしれませんが、基本的な考え方は変化ありません。
　子どもたちの豊かな心を育むという点については、豊かな心の中に、現在の課題として、いじめ、不登校、不適応という問題が出てきています。例えば平成18年には、中学生が非常に元気よく賑やかだった中で、茅野市教育として読書と図書館教育を根幹に据えて子どもたちの心の育ちを図っていくことを考えました。ただその後、いじめ、不登校、不適用の問題が新たに生まれてくる中で、子どもたちの豊かな心を育むための新たな施策も必要となっています。
　４年ほど前になりますが、心のよつばのクローバープランというこころの教育を始めました。今回、教育関係の行政アドバイザーとして不登校、いじめの専門家である八並先生、そして特別支援教育の専門家については、学びの多様性の中で信大の永松副学長先生など様々な方々のお話を聞く中で、子どもたちの豊かなこころを育むために、１つは多様な学びの設定や体験活動のあり方等について検討を進めていきたいと思っています。
　８ページ、社会教育の推進、特に公民館活動になりますが、やはり公民館活動が市政の一番の基礎、まちづくりの基礎になったと思います。大きくコロナ禍で進むことができませんでしたが、公民館活動の中心に防災を据えて、研修会を取り組んでいます。２月12日の研修会では、長野の長沼公民館長で、災害を乗り越えた元館長から学んでいく会を設けたいと思います。
　それからスポーツを通じた健康づくりの問題として、１人１スポーツという形で進めて参り

ました。その中で、新たな課題として、部活の地域化という問題があります。中学校の部活を地域の人にやってもらえばいいという単純な問題ではなく、部活自身子どもたちのスポーツを地域の中でどのように位置付けていくかという大きな問題を抱えると思います。よく部活動地域化といえば、先生方の働き方改革のためと言われていますが、スポーツ庁からも児童生徒数、教員数が減っていく中、また学校教育が変わっていく中で、今までの部活動が維持できなくなっているという見解が示されています。実際に、一番人気のあった野球でも茅野市は１校では維持できない状況です。このような現状がある中で、どのように地域の中で中学校期のスポーツ活動を支えていくのか、地域移行をふまえ、茅野市全体のスポーツ推進をどう進めていくか方向性を出さなければいけないと思います。

文化財の活用では、尖石縄文の問題、さらに、どうやって縄文の精神を人づくり、まちづくりに生かしていくのか、これは守矢神長官の活動についても言えると思います。

以上になりますので、その他については、質問の中でお答えしていきたいと思います。

〇市長

結構多岐に渡り、課題等がありますが、そうした点を踏まえながら、思うところをお話しいただければと思います。

〇矢島委員

今大綱の説明がありましたが、２ページにある、目指す姿の中で今大事にしたいキーワードは、「夢」であると考えています。現状、コロナで分断された人と人との繋がり、私は本来教育というのは「夢」を語る場だと思っていますが、児童生徒は活動を制限され、感染を防ぐマスク生活で、安全に生活することに神経をとがらせています。また教職員は、児童生徒はもとより、ご自分の感染の心配から、本当に注意を払って日々目の前のことに追われているのではないかなと思います。また社会に目を向けると、コロナ、ウクライナ紛争、物価の高騰と生活は日増しに苦しくなる状況で、夢や希望が持てなくなっている現状だと思っています。地域活動を見ても、先ほど教育長のお話のにもありました、公民館活動はコロナ感染防止の観点で、人と人との関わりが失われ、地域活動はなかなか、元に戻っていないのが状況だと思います。これらを見ても、ポジティブな感情を持てない状況にあります。このことから、前向きに目を向けられるというのは今大切にしたいキーワードではないなと考えています。こういう状況だからこそ、一人一人が夢を求めて、前向きに生きていきたいと思っています。具体的な施策等についてはまた、後ほどお話したいと思います。以上です。

〇勅使川原委員

茅野市の教育大綱の中身について、もう一度見直してきて、今教育長からも説明がありましたが、この大綱はこれで見直すところは無いのではないか思います。具体的な細かいことについては、大綱の下にある計画を変えていけばいいことで、大綱自体はこのままで良いと思います。

茅野市教育が目指す姿として、２ページに「たくましさ」「やさしさ」「夢のある」というところが、私が最初の策定から関わってきたどんぐりプランの「たくましく、やさしい夢を持った子どもたちが育っていく」という文言にとても近い表現であり、今、時代が流れてきて、コロナがあったり貧困があったりしてもこのたくましさという少しの困難にあたっても、それを乗り越えていくたくましい勇気を持って育っていこうという目指す姿に当てはまるので、大綱の大元は変えずに、下の計画を時代に合ったものへと変えていけばいいと思いました。具体的な点については後ほど話をしたいと思います。

○若御子委員
　先ほどの大綱の説明を改めていただいたことと、教育長からいただいた説明で、何となく繋がってきたところはありましたが、話を聞くまでは、正直なかなか全体像が見えてこなくて、一番の根本は何なのかをよく理解していなかったですが、先ほどの説明で、何となく見えてきたところはあります。その中で茅野市は、自分の人生、自分たちが生きていくまちの未来を描くというところだというお話があって、そう考えると、自分の人生自分たちが、生きていくまちの未来を考えるということは、結局主体性のある人を育てたいのかなと自分としたとらえ方ができて、結果的にそれが他にも繋がってくような感じがしました。
　よく言う話で、主体性と自主性の違いというところも、教育では必要ですが、ちょうど私の会社でも、年度方針として主体性の発揮というものを入れました。主体性というのは、何をするかが決まっていない状況で、自分で考えて、行動に移していくことで、自主性というのは何をするかが決められている中で、自ら進んで行う人というふうに考えたときに、何をするかが決まってない中で、自分としてどうしたいのかを考えて行動することがより一層求められると思いますので、そういった部分も含めて、何となく見えてきたのかなという気がします
　ただ、この大綱をそのまま読んでも、なかなかそこまでの理解ができないところもありますので、下の具体性というところで、何かもう少し形になればいいと思いました。
　以上です。

○竹村委員
　行政には不慣れですが、一般市民の主婦的な目線から意見させていただきます。私はまだ、このコミュニティスクールが始まる前に、読書ボランティアとして米沢小学校に関わって、その中で、地域に残るものを題材として、子どもたちにそれを伝えるということをやりたいと思って行動していましたが、その一番深いところでは、米沢の自然や歴史的なことから、子どもたちがそれを、醸成していくということを目標としていました。その中の１つとして県花、それから市花であるりんどうの発祥の地をご存知でしょうか。実は米沢が発祥の地です。ただ、その事実を伝えるだけでは、歴史的事実で終わってしまうので、子どもたちにも伝え、県の花が自分たちの土地発祥だという、自信を持ってもらいたかったのです。それは、県外や世界に出ていくときにも心の支えになればいいと思い、学校に関わらせていただきました。マンホールをよく見ると、まだりんどうが残っているものがあって子どもたちはそれで結構盛り上がっていました。その活動が学校の活動とどんどん繋がっていけばいいと思いましたが、地域のことに目を向けてくれる先生が少ないということと、学校の教科とつなげていくことの難しさなどいろいろあって、ストップしてしまいました。何とかならないかなと思っていたら、長野県の別の場所で、子ども、教師、それから地域すべてがWin-Winの関係になる子どもの深い学びの姿があるという事例を読ませていただきました。その一番の根幹は、先日も行政アドバイザーの八並先生もおっしゃっていたように、地域の人をどう味方につけるかというのが学校の救われる方法じゃないかと思います。私たちは地域の側なので、どのように関わったらいいかなと常に思っています。
　その成功した学校はどうなっているかというとまず校長先生が、目指す子どもの姿を明確に示します。綺麗な言葉、きちっとした言葉ではなくて、明確に示します。それに対して、教師たちも１つの軸があり、そこはたまたま「対話を軸にした協働の学び」ということで、動いていますが、教員も地域の方との題材をどうやって学科と結びつけていくかってことを常に考えています。
　もう一つは、マニュアルではないので、教えることは非常に難しいです。なので、そこにア

ドバイザーの先生が入ってその先生もすごく勉強して、それでそれを各校回って伝えていました。ただ、茅野市より規模が小さいので、それが可能なのかもしれないです。

そこにもう一つが、地域のコーディネーターがすごく良い存在ということです。例えば、私は、コミュニティスクールが発足した時に参加させていただいていましたが、その時に行くと、大体学校PTA会長がその他役員を集めて学校の様子は話しますが、いざ何をするのかわからない状況でした。ところがそこは、コーディネーターが地域と学校、その子どもの姿や対話を軸とした協働の学びをとにかく共有しすり合わせることをずっとやっていました。また、コーディネーターは、会議があるから学校へ行くということではなく、学校に席があるのでしょっちゅう出入りしていたようです。コロナ禍前の話ではありますが、頻繁に出入りしているので、子どもたちの様子を分かっていて、学校の先生も実務的な打ち合わせが出来ていました。

さらに一番大事なことは子どもの姿で、小中一貫した見方と考え方で教育するという地域と学校の考えがあるので、中学に上がった時に、小学校の先生と考え方が同じだとわかってくるようです。さらにその子たちが高校へ進学して、ある先生が問題を出したときに、その生徒は、それは対話に耐うる学習問題ですかと質問しました。このように、教育というものは、ずっと繋がっていると思いました。それは、その学校で軸となるものをはっきりとしてみんなが共有したからということを私は感じました。この一貫した考え方であれば、茅野市の問題になっている生涯学習にまで繋がっていくのではないかと思います。

山田教育長からもお話もありましたが、茅野もいろいろ活性化して、いろいろ考えられていますので、今の子どもたちは自分で何だろうって探求していくことができていくかもしれませんが、すでに大人になっている人たちが、公民館活動も含めてどうしたらいいのだろうなということが一つあります。それは、最近になって聞かれたことですが、森林が適正に、積極的に利用されてないことが問題だと思う市民がいて、それは防災にも関わっていて、その人は文章にして私に持ってきました。その人は、講演会等にも積極的に出席して、学ぼうとしている姿がありました。一般市民は知らないですが、行政や専門家は同じように問題意識を持って検討や活動をしています。しかし、一般市民にはわからないので、一般市民として、財産区員区民として、今後できることを知りたいが、どこに聞いたらいいかわからない。今後は役員ばかりでなくて財産区民も状況を学んで、知恵を出し合い専門家や行政とも連携して課題の解決方法を見つけていきたいと言っていました。このことについて、本日答えが出なくてもお伺いしたい内容だなと思いました。

そのお話を受けたときに私は、明治神宮の鎮守の森を思い出しました。実は明治神宮の周辺は数100年前荒地でした。しかし、植物博士の方たちが、人工的に150年後に永遠の森になるように計画して、作り始めたのが明治神宮の森です。当然150年後には自分たちは亡くなっていません。そして現在都会の中に、王者である大鷹がいます。そこでふと思ったのは、100年先の姿をはっきり見据えて今を生きる事が大切じゃないかと思い、先に見えるビジョンを明らかに示していただきたいというのが市長へのお願いです。それは、学校教育においても、先ほど申し上げたように、目指す子どもの姿を明らかにしてもらえると、地域の方などは協力しやすいのではないかと思います。

○市長

この大綱は、ベースはこれでいいのではないかという中で、でももう少し変えていかなくてはいけないのではないかというようなお話をそれぞれいただきました。実は、それぞれがリンクしている話だったと思い聞いていました。例えば、学校と地域との関わり方の中で公民館がそこにどのように関われるかという課題がまた出てきますし、やり方がいろいろあるのではないかという気がしました。それから、将来的なビジョンというものを行政が示すものと教育と

いう分野でのビジョンというのは少し違ってくると思いますが、行政が絡むいろいろな分野において、学校が交差点的な役割を果たして市全体のことも動いていったりします。それは環境の問題であったり、地域の歴史問題を深掘りするというようなことであったり、或いは主体性というものを育てる場所になったり、いろいろな可能性があるのかなと思います。そしてもちろんそこで夢を語るという場にもなるだろうという感想を受けました。

ちょっと先ほどから矢島委員、勅使川原委員も具体的な話というようなことで、冒頭おっしゃっていましたので、その辺りも具体的に考えていることをざっくばらんにお話しいただければと思います。

〇矢島委員

先ほど、市長もおっしゃった「夢」というキーワードを考えたときに、具体的な施策として見れば、昨年行われた宮川小学校、永明中学校で行われたキャリア教育が私は大変参考になりました。市長もご覧になった宮川小学校でのドリームゼミでは、子どもたちの漠然とした将来の夢を具体化してくれるものでした。私は薬局のコーナーを見ましたが、そこで体験をした６年生と思われる児童は、「将来薬剤師になってね」と薬剤師に問いかけられて、はい、と笑顔で答えていました。このやりとりは、おそらく彼女の心に残り、将来の具体的な夢に繋がっていくものと思います。このような、夢の持てる取り組みをできれば市内全員が体験できるような、そんな仕組みづくりを期待しています。具体的には、小中一貫校の中で、小学校５６年生、中学１年生で、３年間事前のワークショップを体験して、中学２年生で具体的に、社会に出て、企業、職場等に体験ができるような仕組みづくりはどうかと考えています。一方、社会にあっては、大綱でうたわれている。市民１スポーツをより一層推奨していただき、趣味を生かして前向きに生きようとする市民の育成そのものを期待しています。そんな中で、先ほど、教育長からもお話ありました部活の地域移行の担い手が育つ、そんな仕組みができるといいなと思っています。地域にあっては、公民館を中心とした人と人とを結ぶ活動の復活を期待しています。私たちは、人と関わることで前向きに生きてきました。そして関わりたいという本能を持っていると思います。人と関わることで、新たな展開が生まれます。

さて、高齢者にとっては、今更夢っていうのは少し持ちにくいと思いますが、私が公民館に勤務した時、94歳の高齢者大学受講の方が、ここに来ることが楽しみなんだよ、と語ってくれていました。前向きな言葉をもらったものと思います。また、これは昨日の新聞ですが、91歳の方が投稿し、提案されています。この方は、高齢者大学利用講座の講師の先生です。生涯学習で前向きに生きることができる市民を増やして行きたいと願っています。夢を持ちにくい、今でございますが、ぜひ「夢」をキーワードで取り組むべきだなっていうことを私は考え願っています。以上です。

〇勅使川原委員

今、矢島先生からもお話があったように、宮川小学校でのドリームゼミや永明中学校のジョブギャラリーは、何年もずっと前からやっているキャリア教育とは少し違い、前のキャリア教育は子どもたちが、幾つかある職業の中から選んでそこへ行って１日か２日体験して帰ってくるみたいなものでしたが、今茅野市で行っている宮川小学校や永明中学校の活動は、少し違った感覚で行われていて、流れ的には、子どもは小さい時って家にいたら、お母さんや、おばあちゃんや兄弟で、ままごとをして、社会のことを勉強していきます。人との交わりの中で、保育園に入るとそれがごっこ遊びに変わって人間社会の勉強をしていきます。小学校では宮川小学校のような職業のことを勉強していって、中学校になるともう少し発達して、いろんな職業を深く勉強しながら、それを自分たちも体験していくという流れをつくり、いろいろな世界の

人たちを、子ども達に見せてあげて経験させてあげたいなと私はすごく思っていて、特に発達障害の子たちは、どんな人に会ったかで、その子たちの可能性が大きく変わっていくし、通常学級にいる子どもたちも、いろんな職種があって自分には、選べるという希望を持たせてあげられることもできると思います。小中高と発達していくにあたって、もっと沢山の職業が世の中にあったり、自分はそこにも行けるかもしれないっていうものを、先ほど矢島委員がおっしゃった「夢、希望」という意味で子どもたちにいろいろな社会の人や、職業、経験というものを、生きる力として茅野市は、段階的に子どもたちに与えてあげるような教育、体系ができていけば、世界に広がってグローバルな子や、もっと探求して深く追求できる子、特別な力を発揮する子も出てくる可能性があります。いろいろな体験、経験をさせてあげるものを茅野市の教育として、子どもたちに、与えてあげられるとしたら、チャンスを与えてあげたいなと思っています。

○若御子委員

２人と同じような話になりますが、やはり、キャリア教育というところで、職場体験はもっと深くやってもいいのかなと思います。小中学校で、今まで行われていた職場体験は、こういう職業があって、こういう仕事をするというところはもちろんあると思いますが、さらに踏み込んで、この仕事をするためには、どうしたらなれるのかというところをさらに深いお話をしてもらえばいいのかなと思います。例えば、薬剤師になりたい時に、何となく薬剤師になりたいだけではなくて、主体性を持って、薬剤師に私は絶対なるというときに、今からどういうことを自分はしたらいいのかという所を自分なりに考える事が必要かなと思っていて、おそらく高校生になれば、大学を選ぶのに、こういう大学に行けばこういう職業に就けるというのがわかると思いますが、ただそれだと遅い職種もあるので、やはり小学校、中学校ぐらいから、そういったところを自分なりに考えて、努力していく。薬剤師の場合であれば、まずは資格を取る。資格を取るためには、薬学部に入らなければいけない、薬学部に入るためには、数学、理科といったものをしっかり勉強しなきゃいけないとなれば、将来なりたい職業になるためには、算数は大事だと、理科は大事だというところに繋がっていく気がします。

自分の話をすると、正直、中学校、高校生の時に、数学理科などは、何の役に立つんだということで、正直ほとんど勉強した記憶が無くて苦労した記憶があるので、なりたい職業にはどうしても必要だということが小学校、中学校のうちから繋がっていくと、より一層将来主体性を持った動きができるのかなと感じました。以上です。

○竹村委員

勅使川原委員や　矢島委員がおっしゃるように単発で、イベント的にやるのではなくてそういう流れの中で、目標に向かって継続することが大切だと思いますが、実際中学生の中には、自分は何をしたいのかがわからない子が多いです。そのための苦しみもあると思います。今、高校に進学するとしても、大体は普通科です。様々な経験をしていく中で、やりたいことに必要なことを逆算していければ最高ですが、見つからないからこそ、体験することと、対話を大事にしていかなければいけないと思います。

それを一番感じたことは、信州大の方で、人生すごろくという年代違う人を集めて、すごろく形式で深い内容まで対話をするものです。対話後、ある大学生が、心の支えになりました。と言って帰っていたのを見て、今のようにキャリア教育も含めて、長期的に学習・体験をすることが大切だと思いました。

○市長

キャリア教育の内容が出てきましたが、補足等ありましたら教育長からお願いします。

〇教育長
従来のキャリア教育は進路指導、職業指導的な意味合いが強かったですが、茅野市の場合、平成29年度に当時の行政アドバイザー森田先生から、キャリア教育の新しい方向ということで、今の文科省の方針を１年ほど先取りさせていただき、その方針の中で永明中や宮川小のような様々な学習をしていく中で、キャリア教育を研究していきました
来年度以降のキャリア教育をどうしていくかを考えた時に、永明中や宮川小の方法をすべての学校でやっていくことはできないだろうと考えました。例えば宮川小学校の場合、34の業者をお呼びしました。なぜ34かと考えたときに、宮川小学校が、子どもたちがもっと地域を知って、地域と結びつくという課題を持って取り組んでいたために34のブース作りキャリア教育を実施しました。なので、他の小学校ではまた別の課題がありますので、形が変わってくると思います。
２月12日に分館職員研修会があり、その中で、北部中の生徒会の生徒達がキャリア教育或いは地域と結びつく一貫として公民館活動に関わっていきたいというお願いをします。具体的には、北部中学校区にある分館に行く子どもたちを割り振って決めて、その分館の活動を一緒に作っていこうというものです。昔話を集める、地域の歴史を集める、それから、日中の災害が起きた時の防災活動をお手伝いする、様々なことがあると思いますが、そんな点で、北部中学校形の公民館活動を考えていければと思います。これが発展していけば、小学校との繋がりが生まれてくると思います。
東部中学校の場合は、去年まで「食育」を中心とした地域の関わり、コミュニティスクール中心に活動してきましたが、東部中の地域コーディネーターの永嶋さんが中心となって、「防災」を題材にした活動の中にDX的な要素を取り入れて、地域、学校、を挙げて子どもたちと関わっていきたいなという考えもあります。以上のような活動の中で、子どもたちが本当に夢を持っていくっていうことを大切にしていきたいと思います。
キャリア教育や生き方を決めていく中で、どういう段階があるかということは、ずっと言われてきましたが、これについては、永明小中学校で、校舎一体型の教育の準備をしていて、その中で、生き方の段階的なものがあるかということを校長先生たちは模索しています。

〇市長
生きる力を育むということは、キャリア教育が非常に重要になってきますが、ただ茅野市内だけで考えていくのは間違うだろうなと思います。先ほど教育長が申し上げたように、米沢小学校周辺の状況と、宮川小学校周辺の状況は全然違っています。また、かつて私の息子も含め、子どもたちもキャリアに関わって様々な知識、経験を受けて、体験希望を出しますが、本人がやりたいことを受け入れてくれる会社は非常に少ないです。要するに本人が思っていることに対して、地域がそれに応えられるかというと、そんなことは無く、先生が困ってしまうことがあります。なので、早い段階で将来の方向を決めろ、というやり方をすると、おそらく間違ってしまうと思います。何をやろうと早い時期に決めるというよりかは、何になりたいか、何をしたいかを悩むことが大切で、人はそこで悩むから成長できると思います。なので、子どもたちが悩むことができる知識・経験を育むキャリア教育ができればと考えています。
地域の人達は、自分たちの地域の子ども達には、できるだけのことをしてあげたいと思っているからこそ宮川の「ドリームゼミ」などは沢山の人が集まっていただけたと思います。ただ、地域や時期によっては難しい場所があります。

○勅使川原委員
　保育園や小学校低学年などは、茅野市内などから協力していただき、職業の体験やお話をお聞きしていく中で、学年や年齢が上がっていくにしたがって、世界が広くなっていくので、日本中や世界中から、弁護士やドクターなどの児童生徒のやってみたい、お話を聞きたい職種の方をお呼びできるような体制、チャンスを茅野市として、整えてあげられればいいのではないかと思います。

○竹村委員
　さらに、仕事の内容だけでなくて、その人の生き方にまでスポットを当てた教育ができればよいと思います。

○教育長
　茅野市の人だけでなくて、全国で活躍する方のお話をお聞きすることは子どもたちにとって非常に有益なものになると思います。
　コロナ禍前には、学校教育課長を中心に教育委員会で一生懸命可能性を模索していました。その結果として、永明、宮川、豊平、湖東で実践した平面的で重層的なキャリ教育の先駆けを実践できつつあります。本日いただいた意見を参考さらにより良いものにしていければと思います。

○若御子委員
　企業からの意見としては、現在学校の職場体験は学校ごと実施していますが、それでは受け入れ企業は受け入れに係る手続きや打ち合わせを何度もしなければいけません。例えば市民館を貸し切って、２日間ほど企業に来ていただいて、時間を決めて各学校が体験会を実施すれば、企業側の負担は減り、学校としても市内一円でまんべんなく体験が出来るのでは無いかと思います。

○竹村委員
　体験やお話をお聞きする際に地域や企業の方にとっては、市あるいは学校のキャリア教育のテーマに沿った話をするほうが楽なのでしょうか。

○若御子委員
　正直な話、業界問わず企業はみな人手不足なので、自分の仕事に興味を持ってもらい、一人でも多く自分の会社、業界に入ってもらいたいと思っています。

○市長
　企業側の考えとしてはそれに尽きると思います。また、工業メッセなどは、高校生を対象として、企業の魅力を伝える場面が多くみられますが、宮川小で開催した「ドリームゼミ」は、クリーニング屋さんや楽器屋さんなどの様々な業者の職業を体験できる内容でした。小学校だとまずはどんな仕事があるのかを体験して、年代が上になっていくにつれて具体的にどんな仕事内容なのかを学んでいくことが理想だと思います。ただ、地元の企業から見れば、地元に残ってもらって地元で就職してもらうことが理想なので、その部分とどうやってミックスさせるかが難しく、子どもたちの可能性をあまり狭めさせてはいけないと思うし、それこそ海外で活躍したいと思っている子もいれば、地元に残っていたいと思っている子もいて、それは本人の選択なので、それを大人たちが強制させることは間違っていると思います。

○竹村委員
　だからこそ、学校の方針を明らかにしていかないと、学校と企業でやりたいことにギャップが生まれてしまう可能性がある。

○市長
　理想を追い求めて途中で挫折してしまったいい例は地区こども館で、地区こども館は、もともと地域の人がそこへ行って子どもたちに本を読んだりする屋根のある公園という考え方で、そもそも始まりましたが、いつの間にか市の事業になってしまいました。そもそも、場所だけ用意してくれれば、あとは市民がやりますという発想だったのに、市の職員がいて当たり前という状況になってしまっている。
　理想は大事ですが、実際それが運営できるかという実務的な考え方もしていかないと長続きしないのではないかと思います。

○竹村委員
　今のこども館の話もそうですが、いざスタートして少し様子おかしいとなったときに、もう一度やり直すことは、どなたかの一括でできるものですか。

○市長
　なかなか一括で、判断を下すことはシステム上難しいですが、すこしずつでも修正していければと思います。

○勅使川原委員
　地区こども館、0123広場も含めた流れの中で、茅野市では学童クラブと子ども館がありますが、国で言っている地域の人たちが学校で関わって勉強を教えてあげられるボランティアの人であったり、触れ合って遊んだりという放課後児童教室が国で言われていますが、最初、茅野市のどんぐりプランの中では地区こども館が各地区センターにあるので、そこに地域の方が来て、勉強を教えてあげたり、子どもと話したり、会話の中で年寄りも元気になるし、子どもも寂しい思いをしないという場になるように考えてスタートしましたが、今市長がおっしゃったようにいろいろな弊害の中で、スタート当初とは少し違う方向性になってしまっている。
　しかし、時代も変わってきていて、学童クラブがあるのもよし、地区こども館があるのもよしとなっていて、学童クラブに行かせたい人は行かせればいいし、地区こども館で子どもが集まって一緒になってワイワイ遊んだり、そこにじいちゃん、ばあちゃんが行って話したり、勉強を教えてあげられたりという時間が作れればいいですが、共働き世帯も増えてきているので、午後５時に閉めてしまったら、一番寂しい薄暗く寂しい時間を１人で過ごさなくてはいけないので、長く遊ばせてもいいし、親が会社帰りにそこに迎えに行くと預ける場になっているので駄目だと言われていますが、世の中が変わってきて共働きで長く働いている方も増えているので、その時間地域の人と関わっている方がいいじゃないかというところを、もう１回見直して、今まで放課後児童教室の内容に関わって、国の先を行っているのが茅野だったので、茅野市のやっているこども館という活動の内容を、地区の人たちも含めて市民と一緒に考えながらそういう方向にもっていくことはできないのでしょうか。

○市長
　活動内容を考え直す時期に来ているなと個人的には思っています。例えば、こども館という

名前にこだわらず、児童館という形にすればいろいろな国の制度に適合する部分が出てきます。さらに、茅野市は、こども館はありますが、児童館数は０になっているので、子育てランキングも上がります。茅野市では、名称の部分でもこだわって決めている内容もあるため、慎重にその部分の交通整理をしていかなければいけないと思います。

こども家庭庁ができることによって、国は、このような事業をNPOなどに委託する方向であると考えています。ただ茅野市では、できるだけ市民の皆さんにお願いしたいという点にこだわりがあります。しかし市民は動ける人、余裕のある人たちが減っていって、団塊世代の人たちが、さらに年を取ってしまうとほぼ担い手がいない状態が来ます。だからこそ、市民の中で議論を重ね、方向性を決めて舵を切り直さなければいけないと思っています。

ただ、茅野市の場合は、どんぐりネットワークの中心がどこなのかという問題を考えていかなければ、茅野市の教育の軸が作りにくいのではないのかと思います。そしてその軸を誰が担っていくのかという点について皆様はどう思われますか。

○勅使川原委員

教育の軸はもちろん子どもで、その子どもに関わる各種団体の方々が、どんぐりネットワークの軸を担っていくはずが、いつの間にかそれが薄れてきて、学識経験者等の個の存在が会議の中で多く発言して、本来は、同じ母体の中で一つの方向を向いていくはずの会議が、それぞれ乖離した関係になってしまっているのが、今のどんぐりネットワークの状況だと思います。

そしてそれはどんぐりネットワークだけでなくて、市民活動自体がそのような方向に変わってしまっていて、一度大々的な見直しが必要な時期に来ていると思います。

○矢島委員

勅使川原委員がおっしゃるとおり、どんぐりネットワークだけでなくて、市民活動のすべてがそのような課題を持っているのではないでしょうか。例えば、このどんぐりネットワークにしろ、発足当時はすごく盛り上がりましたが、それがだんだん本来の意味がわからなくなってきていて、いろんなところで弊害が出てきていると感じています。

○竹村委員

皆様のお話を聞いてなるほどなと思い、財産区や保健補導員も同じ状況だと思います。一昔母たちがやっていた頃は、一人一人の健康に気を配り、管理していましたが、今行くと、個人が健康になればそれで終わりで、市民に広げることはあまりありませんでした。財産区も役員がまわってきたから去年やったことをそのままやればいいなという感じなので、全体として見直しが必要な時期に来ている気がします。

○勅使川原委員

竹村委員のお話をお聞きして思いましたが、保健補導員などは、それができた当時は、その仕事がとても必要な時代だったと思います。しかし、ほとんどの地域の方が、その役割が無くてもできるようになってきたので、仕事自体も少なくなっていると思います。子育て支援においても、当時は無ければ茅野市としては成り立っていかなかった役職、団体が、行政やNPO、民間の方々が子育て支援に参画していただいたおかげで、前ほど組織自体が必要ではなくなっているのかもしれません。なので、その時代に合わせた組織のあり方を考えていく時が来ているのかもしれません。

○矢島委員

公民館も同じで、一昔前は生きるための公民館とまではいきませんが、いかに収量を増やすか、といったような生活に密着したことがテーマで活動が行われていましたが、今はだんだん薄れてきています。先ほど教育長から話があった中学生が公民館と関わることは、一つの起爆剤になるのではないかと期待しています。

○教育長
ぜひ成功させたいと思います。一昨年、公民館活動が長野県で一番盛んな地区に視察に行きましたが、同じ課題を抱えていました。

○市長
公民館や高齢者大学などは、総合的な学習のような場面で学校との接点を持ちやすい気がしますが、どうでしょうか。

○教育長
例えば、コミュニティスクールを一つの単位として、その学区でどのような子ども育てたいかを打ち出すことはできます。ただ、言葉ではないので、やはり地域の人との関わりの中で、子どもを育てていくという次元から始めていかなければと思います。公民館はかなり接点があると思います。

○市長
地域の人と、学校の児童との接点も増えて、公民館は何を題材にしてもよい場所なので、地域の歴史みたいなことでもいいし、茅野市全体に統一で防災のことでもいいし、いろんなアプローチの仕方があると思います。そこに高齢者大学へ行くような積極的な方々に関わってもらうとまた違った形で活動に変化が起きると思います。

○若御子委員
話がそれてしまうかもしれませんが、正月にどんど焼ききがあり、事前に日程をPTAなどで決めて、公民館の関係者連絡会議で日程をお伝えしたら、いわゆる地区の長老にとても怒られてしましました。というのも、どんど焼きは本来、小正月にやるもので、今年はちょうど土日にもなるので、なぜその日程でやらないのかという内容でした。結局これも、いわゆるPTAの世代で、何となくやればいいというスタンスで今まで活動してきたので、なぜこの時期に実施しているのかといった筋を教わることのないまま、何となく動いてしまったということが実際今年にありました。公民館活動もそうですが、伝統や行事について内容を共有できる場をしっかり設けることは活動を繋げていくにはとても大切なことだと思います。

○市長
そのような問題も、公民館や学校との接点ができてくると、そのような話も聞ける場面も出てくるだろうし、いわゆる生涯学習と学校の教育の融合のような形を考えていくことは良いのではないかと思います。その中で、キャリア教育についても、市と学校がすべてを担っていくのではなくて、公民館とも協力していくことで全市的に結びついて行けると思います。

○矢島委員
市長がおっしゃったように、公民館がハブのような機能を持って、色々な場面で総合的に協力ができればいいことだと思いますが、３年間活動がなかったので、今までの活動に戻すこと

はとても大変なことだと思います。

○市長
　昨日の市民号では、人が集まるか心配しましたが、バス２台分の人数が集まりました。公民館なども、やりたいことを明確に提示ができれば、人が集まってきてくれる可能性があると思います。

○竹村委員
　それが、今回のテーマである「軸」ではないでしょうか。

○市長
　軸をしっかりとしていれば、市民活動で分散していった人たちが、公民館に集まる可能性すらあります。今、分散してしまったが故に、トータルコーディネートできるような体制に今なっていなくて、全体としてどうなっているのかが誰も把握できていない状況になってしまっています。やはり、公民館は、学びと実践の基礎ができていた人たちが、市民活動をしたので、上手くいっていました。しかし、現在では、一般の方がなかなか入りにくい状況になっています。

○勅使川原委員
　コロナがあって色々な活動が停滞してきていることを逆手にとって、0123広場などは、困っているお母さんが集まって、一人での子育てだけでなく様々な方と交流していく中で心を休め、広げていくというコンセプトでスタートしていましたが、このコロナ禍で方向性が分らなくなってきている状況にあるので、もう一度最初からすべての市民活動団体を公民館登録団体として登録して仕切り直しても良いのではないかと思います。

○市長
　各市民団体を市がサポートしなければ立ち行かなくなっていて、市の職員も人手不足ということも念頭に置いて考えれば、仕組みを考えなければいけない時期にきているので、今までの、いわゆる市民活動のお手伝い的な事業の見直しも含め考えていければと思います。

○竹村委員
　ちょうど転換期が来ていると思います。
　山田教育長お聞きしたい内容ですが、八並先生が先日の後援会の中で、学校の先生方へ色々なことをおっしゃっていた中で、学校が困ったら、地域に助けを求めていいと言っていましたが、学校の個人情報もあるなかで、そのようなことは可能でしょうか。

○教育長
　生徒自身の問題については、個人情報があり難しいですが、コミュニティスクールの中に家庭教育支援部会というものを作り、民生児童委員の方に入っていただいています。地域によって差はありますが、民生児童委員の方に相談して、年に１回連絡会を設けています。
　もう一つは、人権擁護委員の方に、読み聞かせをしていただいています。読み聞かせだけが目的ということではなくて、学校の中に人権擁護委員の方が月に１度入っていただくことも目的となっています。現状全校ではないですが、人権擁護委員の方と先日打ち合わせしていく中で、４月からは、全小学校で実施していきたいと考えています。そこで地域との結びつきを作

っていければと考えています。
　また、困難な事例については、育ちあいちのと要保護児童対策地域協議会で、地域と繋がって考えていくという方向性です。先日も１件、子どもの問題がありましたが、地域の中で、ということが解決のための大きい課題です。

○竹村委員
　最後に、職員の皆様のご意見をお聞きしたいです。

○こども部長
　今お話いただいていた、子どもたちがどんな体験をして、そこからどんな学びをしていくのかという部分が、子ども達の未来に向けてすごく大事なことになっていくと思いますので、やっぱそこをどうやって地域を支えていくかが大切だと思います。学校と地域それぞれでできないものがあるので、地域と学校一緒になって、様々な体験をしてもらえるように私たちも行政職としてこれからも大事にしていきたいと思います。

○生涯学習部長
　生涯にわたって学び続けることの根底にあるのは公民館や生涯学習であって、課題に対して、いろいろな方法があると思いますが、市として、何か命題を与えること自体が、生涯学習を阻害してしまうような気がします。要するに、自分たちで課題を見つけ、それを解決していこうという本気度が求められないと、生涯学習は、何か習い事さえできればいいといういわゆるそのカルチャーセンター化してしまうと思います。戦後間もなくの公民館発足から時間が経ち、社会情勢が変化していく中で、解決しなければいけない命題も変化してきています。それを市が提示するのではなくて、市民の方が自ら命題を見つけるきっかけ作りができるような公民館を制度的、組織的なことも含めて考えていきたいと思います。
　先ほど教育長お話ししましたが、子どもたちにその分館の意義を考えてもらうことも一つの方法ではないかなと思います。

○幼児教育課長
　幼児教育でもたくましい子ども、やさしい子ども、夢のある子ども、ということでひと育ちの保育教育を進め、生きる力を育んでいますが、お話を聞く中で私も地域の中で生きているので、子ども館の活動にすごく深く関わっていて、市の職員としてなんかではなくボランティアとして毎月こども館に行って子どもたちと関わっていたので、ここ２年間はほとんど活動ができず、不安を感じていました。
　私は退職の年を迎えるので、地域で貢献できること、子どもたちのために何ができるかを考えていきたいと思っています。以上です。

○企画課長
　企画課では第６次総合計画を策定しています。この過程でも、お子さんたちのことや教育のことについても、委員会の考えや子どもたち目線の意見をお聞きすることが必要だと思いました。さらに企画課は、DXを推進している立場でもあります。デジタルなどいろいろなツールを使い、子ども達のたちの生活がどんどん便利になっていく。その中で、いつの間にか迷路の中に入っていて、いつの間にか道筋が決められてしまっている。そんなイメージを思う時があります。そういったところも地域の方と一緒に考えていかなければいけないなと思います。以上です。

○生涯学習課長
　生涯学習課では、たくさんの市民団体がいらっしゃるので、その皆様と一緒に連携して活動することや、公民館活動について考えています。ちょうどコロナによる規制が緩和されることに伴って、市内約280の市民活動団体の皆様に公民館の団体登録の方法を説明したところです。一方でコロナ禍が影響して、活動の継続を希望しているけれど、人手不足となっている団体も多くあります。そのような団体をどう支援していくか、どう改革していくのかを今後考えていければと思います。

○こども課長
　本日の会議の中で、私どもの課に関係があるのは、勅使川原委員がおっしゃっていた地区こども館についてかと思います。さらに現在、貧困対策についての推進計画を作成中で、完成に近づきつつありますが、引き続き深く考えていかなければいけないと思います。
　また、来年度にどんぐりプランの中間見直しが課題となっています。そちらについても、本日いただいたご意見を参考に、内容の変更等をしていければと思います。
　茅野市は行政と市民が平等というパートナーシップで、様々な施策を進めていくというスタンスです。当初私が関わっていた頃は、行政はほぼ何も言わずに、市民の方が集まって意見を出し合うという会議がほとんどでしたが、再び教育委員会に戻ると、市民側と行政側が互いに意見を出し合うような会議が増えていると感じました。ただ、そこで感じたのは、行政と市民の間に厚い壁があり、なかなか歩み寄れない部分もあるということです。互いに意見を交わす中で、歩み寄っていくことが大切だと思います。

○文化財課長
　今日の会議の中で、学校の子ども達と地域の関わり、市民団体の市民活動と市の関わりの中で、学びの場として公民館活動が見直されているということを感じました。

○スポーツ健康課長
　コロナも収まりを見せていて、様々な活動を再開するのにちょうどいい時期だと思います。市でも、区の役員や、仕事内容を見直す動きもあるので、よりシンプルなものになればと思います。スポーツ健康課の立場としては、部活動の地域移行の問題は大変難しい問題だと思っていますが、スポーツ協会と力を合わせて、教育委員の皆様からもご意見をいただきながら、進めていければと思います。以上です。

○教育総務係長
　私は、子ども２人いますが、茅野市の子育て環境が悪いと思ったことは無くて、そういったところをもう少しアピールしていければと思います。
　コロナ前に玉川の小堂見で分館長の主事をやらせていただきましたが、市長、教育長、委員の皆様のお話をお聞きして、主体性のある活動をとおして子ども達が成長していける場を整備できればと感じました。

○教育総務係主事
　私は、小、中、高と茅野市で過ごし、大学を経て茅野市に戻ってきました。そんな中、今日の会議での皆様のお話をお聞きして、茅野市の教育にはたくさんの方が真剣に意見を出してより良い教育を目指しているなと感じ、私自身もその一員として頑張っていきたいと感じまし

た。以上です。

○市長
　参考までに、傍聴の記者の方にもご意見いただければと思います。

○記者（傍聴人）
　私は、宮川小学校のドリームゼミで講師として、新聞記者についてお話をさせていただいて、子ども達のキラキラした目を実際に見ることができてとても良い経験となった半面、先ほども話があったように、仕事の合間を縫って発表の準備をして当日時間を作ることは少し大変でした。取組み自体は非常に良いと思いながらも、先ほどの理由等で、継続的に実施することは難しいなというジレンマを抱えました。
　かつての市民活動が活発だったころは、動けるシニアの方が多くいたことも理由の一つだと思います。弊社でも、65歳以上のシニアの方々に手伝っていただかないと仕事が回らないのが実状です。そして、その方たちは今、力や経験があって体は動き、区の役員をやるべき年齢ではなく、様々な活動ができる場所が、茅野市では用意されていたので、本来ならそこで活動をするはずが、企業の人手不足によって、手伝いをしなければならない状況になっているのではないかと思います。

○市長
　最後に教育長から総括をいただきます。

○教育長
　10月の高齢者大学の卒業式に84歳の方が出席され、とても穏やかな顔をされていました。
　１月にちの保育園のアプローチを視察した際には、賑やかにカルタ遊びをしていて、自分でかるたを作った後、保育士の先生と膝の上でだっこしている姿を見て、高齢者大学のおじいちゃんと子どもの姿と重なりました。
　今朝は、永明小の子が、手袋もせず、ものすごい勢いで学校を目指して走っていきました。
　たった三人の姿ですが、高齢者の方、年長の子ども、小学生の子どもは共通して、自分が学んで生きているということにとても満足感を得ていました。その満足感をこれからも大事にしていきたいと思います。

○市長
　活発なご意見いただき本当にありがとうございました。今日は特に何か結論を出すということではないですが、今日皆様方からいただき意見をしっかりと今後に生かしていきたいと思います。以上で茅野市総合教育会議を終了します。